

「文化」も流動的であることについて

—文化史をめぐる断片とその綴集

中林 広一

はじめに

アジア研究センターにおける研究班「アジア圏における文化の生成・受容・変容」では文学・芸能・美術・思想など様々な分野の研究者が集い、文化の持つ流動的な性格について検討を行っている。多様な分野の研究を通じて示される各種事例は、単に「文化が流動的である」という点を指摘するだけではなく、文化がどのように生まれ、受け入れられ、変わっていくのか、そうしたダイナミクスに対する認識を豊かにさせるものでもある。

無論、筆者が専攻する歴史学においても当然文化は研究の対象に含まれており、これまでも実に膨大な量の成果が世に問われてきたが、これらの研究には文化にまつわる事象について事実の確定を行うにとどまるものも多い。歴史学において文化の動的な側面に対する考察にまで踏み込む成果は決して多くはなく、そこに文化人類学との差異が見出される点については先に草した短文にて指摘した¹。

文化史をめぐるこうした傾向が生じた背景については、文化理解の側からのみならず、史学史の立場からも強い関心を抱かせるが、これに加えて注視すべきは文化史という研究分野のあり方である。文化史は文字通り捉えれば「文化の歴史」ということになるだろうが、タイトルに「文化史」を冠する著作をいくつも繙いていくと、次第にそう単純な話ではないことに気付かされる。

試みにいくつか例を挙げてみよう。筆者が専攻する中国史の分野から「文化史」をタイトルに含める著作として間野潜龍『明代文化史研究』を挙げてみる²。本書は歴史書・儒学・仏教・道教などに関する論考をとりまとめた論文集であり、学術や思想・宗教にまつわるテーマが主として扱われる著作ということになるが、タイトルに「文化史」の語が含まれることに違和感を覚える向きは少なからう。

間野の著作では複数の分野にまたがる議論が展開されているが、特定の事物に絞り込んだ形でなされる文化史もある。「○○の文化史」というタイトルの書籍が数多く出版されていることは周知のことであろうし、シリーズとして刊行されている法政大学出版局の「ものと人間の文化史」は2021年末現在で187点が名を連ねている³。

これらの文化史とは違ったタイプのものとして、笠井昌昭編『文化史学の挑戦』という論文集を挙げておきたい⁴。これは40名の研究者が論考を寄せる質量ともに重厚なものであるが、そこに掲載された論考には美術や宗教・思想といった分野だけではなく、法・政治・外交などの分野に関するものも含まれており、文化史としては大変幅広い領域をカバーしていることが分かる。

同じく多彩な内容を含めたシリーズとして『岩波講座 近代日本の文化史』も挙げておく⁵。こちらでも文学・芸術・宗教といったテーマに加えて、時間・メディア・表象・身体・女性・教育・戦争・ナショナリズム・植民地・都市などが採り上げられている。多彩さという点では笠井編著と同質の作品と言えなくもないが、取り扱うテーマに重複するものが少ない点は特徴的である⁶。

一口に文化史と言っても、このように様々なタイプの文化史が展開していることは上記の紹介から自明であろう。と同時に、このことは文化史の多様性に対する疑問を惹起するものでもある。いかなる背景によってこうした状況が生じたのか、という歴史的な経緯に私たちの関心は向くが、当然この背景は「文化」という語の捉え方と深い関わりを持つことにもなる。

以下、こうした点を意識しつつ、文化史というカテゴリー、そして「文化」という概念について整理

を試みてみたい。

1 文化史の多様性

さて、検討を進めていくに当たり、まずは文化史の類型を確認しておきたい。先に文化史のタイプをいくつか示したが、これらを大まかに分けると以下ようになる。

A…芸術・芸能・思想・学術・宗教・生活などの文化要素を取り扱った文化史

B…A の文化要素に加えて、政治・経済・社会などの分野も加えた文化史

まず、A に含まれる各分野では、「文化」の語に対して一般的にイメージされる事象が取り扱われていることに異論はなかろう。高校日本史・世界史の教科書にて扱われる文化史が A に類するものであることから、人口に膾炙した文化史像ということになる。

そして、B は A の範疇を超えた領域を持つ。かなり多様な分野が叙述の対象に含まれることになった背景については後で触れるとして、こうした記述対象の差異に基づけば、A を狭義の文化史、B を広義の文化史と捉えることができる。

先に挙げた著作をこれらの分類に当てはめていくと、まず『明代文化史研究』と「ものと人間の文化史」は A に該当すると言える。両者は性質の異なるものであるようにも思えるが、その相違は複数の分野にわたった議論を展開させるか、特定の文化要素に絞った論述を行うかという方法論の違いのみにとどまり、言及の対象となる分野は芸術・芸能・思想・学術・宗教・生活のいずれかに収まっているからである。

一方で、『文化史学の挑戦』や『近代日本の文化史』は共に B に該当する成果ということになるが、上述の通りこれらが扱う内容にはやや隔たりがある。この差異は偶然によるものではなく、それぞれの企画が拠る基盤が異なるが故の差異であって、この点を踏まえた上での理解が必要とされる。

まず、『文化史学の挑戦』は文化史学の系譜に連なる位置づけを持つ論文集である。文化史学の起点を求めると、同志社大学の石田一良が戦後間もない時期に設立した文化史学会に行き着く。文化史学会は文化史学の発展に大きく寄与した組織であるが、この文化史学は狭義の文化史とは大きく内容を異ならせる。

笠井昌昭は「文化」の語について「自然の状態に人間精神が手を加え、生み出してきたもの」の全てを指すものとして解釈し、そしてこのようにして生み出されたものとそれを生み出した人間精神の活動、これらを文化史学の研究対象と見なす⁷。こうした理解は、文化史学会設立初期の時点で「殊ニ文化史学ト申シマスモノハ狭義ノ所謂文化現象ヲ対象トスルモノデハナク人間ノ営為ノ一切ヲ文化ト見做シ過去ノ文化ヲ現在ノ文化ヲ創ル立場カラ研究スル史学ヲ意味スルモノト考ヘテキマス」という主張がなされていて一貫しているが⁸、A の文化史との間に相違が生じる理由はこうした捉え方の差異に求められる。

一方で『近代日本の文化史』は歴史学以外の研究者が多く企画・執筆に携わっている点が特徴的であると言える。小森陽一（日本文学）・酒井直樹（思想史）・島蘭進（宗教学）・千野香織（美術史）・成田龍一（日本史）・吉見俊哉（社会学）という編集委員の顔ぶれだけでなく、「学際的な協力を実現」・「ジェンダー論やポストコロニアル批評など、近年の文化研究の成果を反映」といった文句で特色を表現していることもまたシリーズの方向性を示している⁹。またこれらの編集委員の手になる「わたしたちが目指しているのは、従来の意味での「近代史」でもなければ「文化史」でもない」¹⁰という宣言もまたその性格を象徴するものと言える。

とりわけ、「それぞれの学知における脱領域的な問いと、境界を越えて共有しうる新たな語りの地平を創りだしたい」¹¹とする意図は重要である。というのも、それは歴史学以外の視点・方法論の活用を意味するからである。この点を踏まえると、『近代日本の文化史』と『文化史学の挑戦』とで取り扱う

内容が重ならない理由は近代／前近代という対象の違いだけにあるわけではなく、それぞれのスタンスの違いがもたらす側面も多分にあることが見えてくる。1990年代以降、文化研究にまつわる諸分野の研究の進展から影響を受ける中で形成されたものがこのタイプの文化史ということになる。

ともあれ、『近代日本の文化史』がこのような方向性を持つことにより、近代日本の文化を論ずるに当たって社会学や文化人類学などとの間に問題関心の重なりが生じることとなる。この点を前提としてつ先の分類をもう少し細分化すると下記のようになる。

【文化史①】…芸術・芸能・思想・学術・宗教・生活などの文化要素を取り扱った文化史

【文化史②】…①の文化要素に加えて、政治・経済・社会などの分野も加えた文化史であり、文化史学の影響を受けたもの

【文化史③】…①の文化要素に加えて、政治・経済・社会などの分野も加えた文化史であり、歴史学以外の学問分野の影響を受けたもの

以上に示した文化史の内、【文化史③】については近年の学術動向の文脈から理解できるものであり、成立の背景ははっきりとしている。その反面、【文化史①】や【文化史②】のタイプの文化史が生まれた経緯についてはもう少し検討が必要になると思われる。そこで次節では、【文化史②】について検討を進めていきたい。

2 西田直二郎と文化史

前節にて文化史学会の設立に石田一良が大きく関わったことを採り上げたが、これは石田がゼロから文化史学という枠組みを作り上げたことを意味するわけではない。石田は京都帝国大学在学中に西田直二郎に師事しており、そこで学ばれたものの影響が文化史学に及んでいる。要は【文化史②】は20世紀後半になって初めて生みだされたものではなく、またその理解に際しては【文化史②】の前段に当たる部分にも目を向ける必要があることになる。そして、後述するように西田による文化史もまた西田の独力で形成されたものではないが、ここでは【文化史②】をめぐる系譜について時間を遡りつつ確認していくこととしたい。

議論を進めていくに当たり、まずは西田の経歴から確認しておこう¹²。西田は1886年（明治19）に大阪で生まれ、1910年（明治43）に京都帝国大学文科大学史学科を卒業する。その後、大学院を経て同大学の副手・講師・助教授を歴任し、1924年（大正13）に京都帝国大学の教授に着任するが、この間イギリスとドイツに2年間留学し、ヨーロッパにおける新しい歴史学を学んできている。留学からの帰国後、1932年（昭和7）に刊行された『日本文化史序説』（以下『序説』と略す）は西田の代表作となる著作であり、本書は日本における文化史の歴史的展開を考える上で欠かすことのできないものである。

この西田の研究について本稿では下記の諸点について着目したい。一つは文化史に関する見識を磨き上げる過程で周囲より受けた影響についてである。西田が京都帝国大学ならびに大学院にて学ぶ中で、内田銀蔵（日本近世史）・原勝郎（西洋史）・内藤湖南（東洋史）などの各教員から様々な形で指導を受けている¹³。西田はこれらの教員に接する中で、実証的な考証史学とは異なった立場からの歴史理解を試みる術を身に付ける。それは歴史を発展的に捉える観点であり、歴史を個別の要素として捉えるのではなく全体史として理解する着想である¹⁴。

内田や原の研究における特徴は、それまで歴史学の主流にあった政治史を主とした歴史叙述、個別の事象を実証的に究明していく実証主義、これらとは異なった立場からの研究を進めたことに求められる。とりわけ経済や社会・文化といった政治以外の要素も含めた形で時代像を描き出している点は、これまでにない取り組みとして日本史学史の中でも特記すべきこととして評価されるものである。

また、内藤は東洋史研究者として著名ではあるが、その関心の幅は広い。最初の著述は日本を対象と

した『近世文学史論』（1897年）であり、また中国から伝わる文化との関わりの中で独自の発展を遂げた日本文化について論じる『日本文化史研究』（1924年）は内藤の代表作の一つに数えられる。内藤と内田・原の研究が互いの交流の中で影響を受けあったことは既に指摘されているが¹⁵、文化を広いスケールのもとで論じるこれら教員に付いて学んだ経験は、西田の歴史叙述の基盤を形成している。

こうした京都帝国大学の学統の中で築かれた歴史認識に加え、ヨーロッパの哲学・歴史学に刺激を受けている点についても着目しておきたい。西田がコンドルセやカール・ランプレヒトに大きな影響を受けていることは永原が強調するところであるが¹⁶、人間の精神が発達する過程として歴史を捉えるコンドルセの論述、同質の事実の集合体から類型を設定することで歴史的事実の整理が可能になるとするランプレヒトの方法論¹⁷、これらは文化史を個別の要素としてではなく、トータルに把握しようとする西田の視点の基盤となっている。

文化史学が他の文化史とは異なった独自性を持っていることは先に確認した。そして、この独自性は西田の研究を強く意識したものである。政治史への偏重や実証主義的な方法論の優勢といった歴史学への反発や歴史を全体として把握するヨーロッパの哲学・歴史学からの影響が西田の描く歴史像の血肉となっていることを踏まえるならば、【文化史②】の根源はここに行き当たることになるだろう。

これに加えてもう1点触れておきたいことは『序説』刊行に当たっての社会的背景である。『序説』の「はしがき」には近年文化史研究に対する要望が大きいこと、一方で歴史学研究においては文化史の概念について混乱があること、これらについての言及がある¹⁸。この記述については、世間で好評を博していた大鐘閣の『日本文化史』や早稲田大学出版部の『国民の日本史』などのシリーズが念頭にあってなされたものとする柴田実の推測があるが¹⁹、この点についてももう少し検討を行っておこう。

まず『日本文化史』と『国民の日本史』はともに1922年（大正11）以降順次刊行されたシリーズである。この1922年という年にこれらのシリーズが刊行された事実には一定の意味を見出すことができる。というのも、後掲の表1を参照すれば明らかなように²⁰、タイトルに「文化史」の語を含める著作が1922年以降急激に増えていくからである。大正時代後半以降、文化史ブームとでも称すべき現象が起きていたことがここから分かるが²¹、当然これは突如として生じたものではなからう。むしろ、それを出現せしめた社会的背景があり、またそれらが時間をかけて醸成されていたと見る必要がある。

一方で『序説』は刊行年こそ1932年（昭和7）であるが、西田が文化史研究に従事した時期はさらに遡ることとなる。『序説』は1924年（大正13）に行われた講演を基としており²²、その時点で『序説』に関する着想は用意されていたと見るべきであるし、大学院時代の研究題目が「日本文化史」、卒業論文のタイトルが「外国神の祭祀と神社について」であることから²³、京都帝国大学在学時点（1907-1910年）で文化史に強い関心を抱いていたことは窺える。

そうした文化史に対する西田の思い入れとは裏腹に、陸続と出版される文化史関連の書籍に対する評判は芳しくない。例えば、岩井忠熊は大鐘閣版の『日本文化史』を採り上げて論じるが、

これらの書物で意味されている文化史とは、政治や経済と区別された意味での狭義の文化現象を対象とする史的研究しているのであって、叙述の実際に当たっては文化を分野別に並列して論じ、それに全体の通観がつけ加わっているものであった。このような文化史の取り扱い方は常識的であるとはいえ、厳密な意味での方法の自覚を欠いたまま、単なる思いつきで総合するという傾向をまぬかれなかった。

と手厳しい²⁴。西田自身が個々の著作にいかなる感想を抱いたか明らかにする資料はないが、文化要素に関する事実の羅列に終始する内容が、西田の構想する文化史と相いれないものであることは確かであろう。文化史をめぐる「概念の混乱」という西田の言はこうした社会的背景も踏まえて理解することが望ましい。

ただ、そうした西田の観点から一步距離を置いてみることも有効ではあろう。有象無象も含めた形で生じていた巨大な文化史のうねりという現象に着目すること自体は当時の社会と歴史学の関係性を理解

表1:「文化史」・「文明史」を冠する書籍に関する年表

刊行年	出版数	著者名・書名（文化史）	出版数	著者名・書名（文明史）
1874			3	ギゾー・欧羅巴文明史 1-2, 3 (?)
1875			1	ギゾー・欧羅巴文明史 4
1876			1	西村兼文・文明史略
1878			1	北川藤太・日本文明史
1879			2	ギゾー・仏蘭西文明史／バックル・英国文明史
1884			1	室田充美・大日本文明史
1885			1	物集高見・日本文明史略
1892			2	青山正夫・支那文明史略／吉田利行・明治新選帝国民国文明史
1896			1	中西牛郎・支那文明史論
1898			2	高山林次郎・提要世界文明史／高山林次郎・世界文明史
1900			1	白河次郎ほか・支那文明史
1902			1	ルヴォン・日本文明史
1903			1	大町芳衛・日本文明史
1906			1	常盤大定・印度文明史
1908			1	谷本富・日本文明史上に於ける弘法大師
1909			2	セーニョボス・現代文明史／日本歴史地理学会・鎌倉文明史論
1910	1	アーチボルド・ウィーア・近世欧洲文化史論		
1911	1	細井肇・朝鮮文化史論		
1913			1	セーニョボス・西洋文明史
1914			1	セーニョボス・欧洲現代文明史
1915			2	小林鶯里・明治文明史／吉田東伍・日本文明史話
1916	1	内田魯庵・きのふけふ 一明治文化史の半面観		
1917			2	齊藤斐章・西洋文明史観／ビューヒャー・経済的文明史論
1919	1	イエーリング・欧洲民族文化史		
1920	1	史学地理学会・京阪文化史論		
1921	5	ウエルス・世界文化史大系 1-3／下沢瑞世・日本欧洲比較文化史／中島孤島・文化史上に於ける女性と恋愛	1	大川周明・日本文明史
1922	21	安藤正次ほか・日本文化史 1-12／ウエルス・世界文化史大系 4-5／国史講習会・文化史観と日本文化生活史／国民文化研究会・稿本国民文化史概論 上代編／国民文化研究会・稿本国民文化史概論 中世編／仏性誠太郎・小学国史 文化史的教授／ペロルツハイマー・法律及経済の文化史的観察／三上義夫・文化史上より見たる日本の数学／箕作元八・第十八世紀仏蘭西文化史・社会主義運動史	2	田邊尚雄・文明史上より見たる世界の音楽

1923	2	石橋智信・イスラエル宗教文化史上のメシア思想の変遷／華園真淳・立教開宗の文化史的考察	4	バクル・世界文明史 1-4
1924	9	青柳綱太郎・朝鮮文化史大全／朝日融溪・西洋文化史論十二講／一氏義良・世界文化史物語／市立大阪市民博物館・大阪文化史論／高桑駒吉・支那文化史講話／禿氏祐祥・佛教文化史／内藤虎次郎・日本文化史研究／橋川正・日本仏教文化史の研究／藤崎俊茂・日本文化史概観	4	エンゲル・文明史より見たる世界の楽器 上・下／バクル・世界文明史 5-6
1925	14	稲葉君山・朝鮮文化史研究／石橋智信・メシア思想を中心としたイスラエル宗教文化史／ウエルス・文化史概観／ウエルス・世界文化史講話／ウエルス・世界文化史／大阪毎日新聞社・大阪文化史／栗山周一ほか・文化史の高等小学国史教授の要訣／下沢瑞世・「日本」の國号の比較文化史的考察／而立社・日本文化史 1-5／増田抱村・児童文化史十二講	1	ルーン・世界文明史物語
1926	6	浅野利三郎・国際思想発達史 一文化史観／一氏義良・世界文化史大系 1／尾佐竹猛・明治文化史としての日本陪審史／カンニング・経済文化史／センプル・地理環境文化史 上／和辻哲郎・原始基督教の文化史的意義	2	上里朝秀・日本文明史／山中謙二・稿本西洋文明史綱
1927	6	石野瑛・横浜近郊文化史／愛媛県立三島中学校文化史編纂委員会・宇摩文化史／国民文化研究会・国民文化史概論 近世編／荻原弘・支那道德文化史 1／諸根樟一・磐城文化史／ルーン・人類文化史物語	2	一氏義良・西洋文明史／田口卯吉・文明史及社会論
1928	8	ウエルス・世界文化史概説／牛窪弘・文化史上に於ける役行者／栗原武平・天平文化史論／小林秀雄・希臘古代文化史／佐藤堅司・西洋文化史講話 古代・中世篇 2／武市雄図・高山幽谷を尋ねて一鉦業日本文化史／西村真次・万葉集の文化史的研究		
1929	3	日本放送協会関西支部・世界文化史／ニヤリング・文明よ何處へ行く 一プロレタリアートの文化史／ベロツク・ウエルズ文化史大系に関する論争／三井甲之・国軍の郷土農村赤化事実の体験認識及び対応の文献文化史的批判訴状一輿論及び司法行政当局官憲に訴ふ	2	中島峻蔵・北方文明史話／山岡克・古代欧州文明史
1930	7	清原貞雄・日本文化史年表／栗田元次・解説日本文化史／台湾文化三百年記念会・台湾文化史説／中村孝也・日本文化史要／西村真次・日本文化史概論／比屋根安定・埃及宗教文化史／文明協会・近世文化史上に於ける大隈重信侯		

1931	12	石野瑛・文化史上の神奈川県／小笠原秀実・文化史の総合的考察並びに飛鳥時代に於ける仏教／坂井衡平・更級郡郷土文化史／笹川種郎・日本文化史／下沢瑞世・日支欧世紀比較文化史／台湾文化三百年記念会・台湾文化史説 続編／西村真次・世界古代文化史 1-2／西村真次・人間性文化史／橋本忠夫・民族及文化史問題／福原武・日本社会文化史概論／ボクロフスキイ・ロシア文化史概論	3	岡邦雄・科学文明史／龍居松之助・日本文明史講話／羽田亨・文明史概論
1932	14	ウエルス・世界小文化史／加藤猛夫・英文学と英国文化史の研究／木宮泰彦・日本古印刷文化史／小林秀雄・希臘文化史／小林秀雄・羅馬文化史／友納養徳・文化史観国史教育 前篇／西田直二郎・日本文化史序説／西村真次・世界古代文化史 3-6／平竹伝三・露西亜考古文化史図説／藤崎俊茂・概観日本文化史／ヴェルハウゼン・イスラエル宗教文化史	1	小宮巴・東洋文明史
1933	14	雨宮信一郎・日本文化史事物起源辞典／小原国芳・日本風俗史・日本文化史／加藤猛夫・中世紀英国文化史概説／北垣恭次郎・日本文化史談 上／給田茂太郎・日本音楽文化史 1-2／高橋俊乗・日本教育文化史／豊山派弘法大師一千一百年御遠忌事務局・文化史上より見たる弘法大師伝／プレステッド・古代文化史／宮川造六・日本文化史／山田平太・日本齒科文化史 1／油谷文化研究会・油谷文化史／リシェ・綜合文化史論 上／世界文化史大系 23	5	島屋政一・印刷文明史 1-5
1934	20	上野菊爾・稿本東洋文化史／衛藤利夫・満洲文化史上の一挿話／オスワルド・西洋印刷文化史／木代修一・日本文化史図録／北垣恭次郎・日本文化史談 中／中川齋・肥後文化史の研究／ヴォルフ・民族文化史／村岡典嗣・日本文化史概説／山田平太・日本齒科文化史 2／ルーン・人類文化史物語 上／世界文化史大系 4-5, 7-8, 10-11, 15-16, 20, 22	1	桑原隲蔵・東洋文明史論叢
1935	16	上野菊爾・日本文化史／上野菊爾・東洋文化史／清原貞雄・明治初期文化史／京城帝国大学文学会・東方文化史叢考／高楠順次郎・東洋文化史に於ける佛教の地位／高谷道男・基督教経済文化史／鳥山喜一・満鮮文化史観／中島鹿吉・土佐文化史伝／中村薫・神田文化史／リシェ・綜合文化史論 下／ルーン・人類文化史物語 下／和田健次・社会文化史事物起原大辞典／世界文化史大系 9, 12, 17-18		

する上で一定の意義があると考えられるからである。

そして、本稿のように「文化」・「文化史」という括り方に関心を抱く立場としても、文化史ブームをめぐる諸事象やその背景を掘り下げることが、文化や文化史に対する理解を深める契機になるものとして期待が抱かれる。そこで節を改めて文化史ブームが生じた大正時代の動向について確認していこう。

3 文化史誕生の背景としての大正時代

大正時代が持つ時代相については様々な形で語られるが、その一つに人々の持つ心性の変化に着目して把握する観点がある。差し当たり、ここでは有馬学・筒井清忠の語りに助けられつつ、それを以下のようにまとめておきたい²⁵。

明治維新後、欧米列強と鎗を削らねばならない国際情勢の中、日本では近代化が国是とされてきたが、日清戦争・日露戦争での勝利に象徴されるように 20 世紀初頭の段階でこうした方針は一定の成果を見て、急激な成長・変化には落ち着きが生じるようになる。また、こうした展開は、国家体制にまつわる様々な制度がシステムチックに整備されていく過程と並行するものであったが、それは立身出世におけるショートカットが失われ、各種試験に合格するための努力やその後の厳しい競争を要する閉塞性の強い状況が固定化していくことも意味していた。

そうした中、進行しつつあった現象の一つが人々の内面の変化である。筒井清忠が日露戦争後に青年層の抱いた関心について論じた天下国家から個人の問題への移行²⁶、有馬学が 1920 年代の社会について指摘する国家的なものの価値の後退・相対化²⁷ は、共にこうした変化にまつわるものとして捉えられる。

これらの変化は以下の出来事と深い関連性を持つ。一つは社会の中に展開する様々な結合を重視し、国家を絶対的な存在と見なさない多元的国家論であり²⁸、いま一つは当時の人々における自我の発見である。そして、これらはそれぞれ大正デモクラシーや教養主義の隆盛といった出来事へとつながっていくものである。

国家という枠組みの相対化と己に対する意識の高まりは青年層を修養へと向かわせる。自身の人格の陶冶に努める修養主義が高等学校に通う学生たちの間で受け入れられるが、教養はその延長線上に登場するものとされる²⁹。エリートのエリートたらしめる存在として教養が尊重されるようになるが、注目すべきはこうした流れの中で「文化」の語が人々の耳目を集めた点である。

その動きの一つとして、ここでは経済哲学者の左右田喜一郎や哲学者の桑木厳翼・土田杏村らが 1910 年代末に提唱した文化主義を挙げておく。文化主義は人生における目的を文化の向上に定め、またそれを通じて文化価値の実現を目指す立場であり、これは新カント学派に属する西南ドイツ学派の影響を受けてなされた主張である³⁰。こうした背景を持つ主張は当然、上述した自我のあり方に強く作用するものであり、それ故に社会の中で関心を呼ぶ。

以上の内容について意識しつつ、次に文化史ブームが生じた背景についてまとめておこう。先の表 1 で示したように文化史を称する書籍は 1920 年代の始めより出版点数が増加する。一方で、左右田が「極限概念としての文化価値」を発表するのが、それより数年遡った 1918 年（大正 7）、「文化主義の論理」を採録した『黎明会講演集』が刊行されるのが翌 1919 年のことであり、これ以降文化主義は人々の間に賛否様々な形で議論を招いた。

また、歴史学界隈では先に確認したように明治末期から大正期にかけての時期にあって、新たな動きが生じている。すなわち、政治史への偏重と実証主義的な方法論への批判がそれであり、こうした動向を反映させた内田銀蔵『日本近世史』は 1903 年（明治 36）に、原義郎の『日本中世史』は 1906 年（明治 39）に刊行されている。また、ジャーナリストとして活動していた内藤湖南を京都帝国大学文学部学長の狩野亨吉が抜擢し、東洋史学講座の講師として採用したのが 1907 年のことであった。このように 20 世紀初頭の段階では、従来の歴史学のあり方とは異なった方向性を模索する人々がしかるべき地位につき、かつその成果を公にできる状況が生じていた。

以上のように 1920 年代初頭の段階において、青年層の間では教養を重視する雰囲気は濃厚になり、

かつ教養と深い関係性を持つ形で文化への関心が高まっていた。それに加えて、歴史学の場合でも 20 世紀初頭より文化史という分野の成立を可能にする土壌が徐々に築かれつつあった。1920 年代にあって文化史の名を冠する書籍が数多く刊行された現象は、これらの条件が揃って実現したものと言える。

4 「文化」の内実と「修養」・「教養」

前節の整理を経て、明治末期から大正期における社会状況と文化史ブームとの関係性を把握することができた。こうした理解を前提とした上で本節では【文化史①】の成立について検討していきたい。

ただ、それに先立って明治期以降の「文化」概念の変遷について確認しておこう。この点については西川長夫や柳父章がすでに明らかにしているが³¹、「文化」の語は“culture”の概念が日本に持ち込まれた当初よりその訳語として用いられてきたわけではなかった。明治時代においては“civilization”の訳語として「文化」と「文明」が混用される状況が長く続いたが、これは西洋由来の概念が日本社会に定着するまでの過渡期故の現象として捉えられる。

そもそも、西川の指摘に従えば、“civilization”と“culture”は前者がフランス、後者がドイツで積極的に活用されたものである。普遍的な性格を持った概念である“civilisation”をフランスが展開させ、それに対抗する形でドイツが個別性を意識した概念である“kultur”を用いる、この現象はそうした対比で捉えられる。19 世紀ヨーロッパの国際情勢の中で覇権的にふるまうフランスと独立した地位を確保したいドイツの関係性が“civilization (civilisation)”と“culture (kultur)”の関係性を生むことになるが、西川はこうした背景を踏まえつつ「文化」概念の固定化について論じ、その初期の事例として陸羯南や三宅雪嶺の著述を採り上げる。そして、陸や三宅が国家の主体性を重視するドイツと日本の立場を重ね合わせつつ、“kultur”の訳語として「文化」をあてがう、西川は「文化」概念生成の過程をこのように描いている³²。

陸・三宅の文章は、「文化」と“culture (kultur)”を結びつける用例としてはかなり早く、19 世紀末に公にされたものである。これがただちに訳語としての固定化に結び付くわけではなく、その実現は 20 世紀を待たねばならない。大正時代に入ってそれは一定の浸透を見るようになるが、上述の左右田が“kulturwert”から「文化価値」と訳出するに至ったことも、この浸透との関わりの中で理解しておく必要はあろう。

ともあれ、西川の示したこの展開は表 1 の内容とも合致するところである。「文明史」をタイトルに含める書物が明治初期から刊行され続けているのに対し、「文化史」を称する書籍は 1910 年（明治 43）に至ってようやく『近世欧洲文化史論』が刊行される³³。訳語の固定化には一定の時間を要したことが本表からも窺えよう。

それを踏まえた上で問題とすべきは、「文化史」という括りに含まれる「文化」の語は何を示しているかという点である。これは「文化」の語と接点を持ち始めた大正時代の人々がそれをどのように把握していたのかという問いかけでもある。そして、この問いに相對していくことは、「文化」概念に対する当時の理解と【文化史①】の内実との関係性を明瞭にする働きもなすはずである。

この疑問について検討するに当たっては、井伏鱒二の文章が示唆に富むため、まずはそれを挙げておきたい。

先生の本読みがあつて間もなく学校に文化事業研究会といふものが設けられた。そのころ私たちは文化といふ熟語をつかひ慣れてゐなかつたので、どことなく物足りない名前だと思つてゐると、片上伸教授はカルチュアを決定的に文化と訳して用ひることにしたのがいささか自慢であると云つた。しかし大むかしの辞書などにも文化といふ単語は載つてゐる。文明開化の鹿鳴館当時には文化的の文化は開化といつて、謂はゆる文化とはいわなかつたものらしい。文化事業会の文化は教養または修養の意を示すカルチュアの文化であつて、いま一般にいふ文化的の文化とはすこしおもむきが異つてゐた。芸術的教養の意味の文化なのである。この趣旨のもとに、野外劇・理想主義哲学・演劇論・文学論を

各先生が講義したが、やがてその会がつぶれることになって坪内先生のシエクスピアの講義がはじまつた³⁴。

生松敬三はこの一文などを援用しつつ「文化」の意味をめぐる変遷を論じるが³⁵、ここでは次の2点に注目したい。1点は「カルチュアの文化」が「教養」・「修養」の意を示すものとして位置づけられていること、もう1点は井伏が文化について「芸術的教養の意味」と説明していることである。これは、演劇・哲学・文学など研究会でなされた講義内容とあわせて考えてみても、明らかに「文化」の意味を狭義に捉える用法であろう。これは【文化史①】の文化理解に通じる「文化」理解であると言える。

もう1点、三木清の回憶から引用を行っておこう。

あの第一次世界大戦といふ大事件に会ひながら、私たちは政治に対しても全く無関心であつた。或ひは無関心であることができた。やがて私どもを支配したのは却つてあの『教養』といふ思想である。そしてそれは政治といふものを軽蔑して文化を重んじるといふ、反政治的乃至非政治的傾向をもつてゐた、それは文化主義的な考へ方のものであつた。あの『教養』といふ思想は文学的・哲学的であつた。それは文学や哲学を特別に重んじ、科学とか技術とかいふものは『文化』には属しないで『文明』に属するものと見られて軽んじられた。云ひ換へると、大正時代における教養思想は明治時代における啓蒙思想——福沢諭吉などによつて代表されてゐる——に対する反動して起つたものである。それが我が国において『教養』といふ言葉のもつてゐる歴史的含蓄であつて、言葉といふものが歴史を脱することのできないものである限り、今日においても注意すべき事実である³⁶。

この文章は「文化」概念に関する貴重な証言であつたと見え、これまでの研究でも幾度となく引用されるが³⁷、文明との対比の中で文化を論じる文脈からは、西川が整理した文化・文明に対する認識の弁別を確認できる。そして、本稿の関心においては科学・技術を文明に属するもの、文学・哲学を文化に属するものと見なしている点に目を向けたい。文学・哲学や科学・技術など個々の文化要素と文化・文明とを対応させる認識は「文化」の範疇・定義にまつわる感覚が人々の間で先鋭になりつつあつたことを窺わせる。また、「文化」に属するものとして文学・哲学を称揚し、政治的なものを退ける。この認識もまた【文化史①】の側に属するものである。

これらの文章は、「文化」概念と芸術・芸能・思想・学術・宗教・生活など特定の文化要素とを結びつける理解が大正時代の時点で成立していたことの証左として位置づけられる。そして、これらの文章には共に「教養」の語が登場することから、狭義の「文化」定義が成立する背景として「教養」の概念との関係性が想定される。この関係性について検討する際に着目すべきは、教養にまつわる和辻哲郎の主張である。

青春の時期に最も努むべきことは、日常生活に自然に存在しているのでないいろいろな刺激を自分に与えて、内に萌えいでた精神的な芽を培養しなくてはならない、という所に集まって来るのです。

これがいわゆる「一般教養」の意味です。数千年來人類が築いて來た多くの精神的な宝——芸術、哲学、宗教、歴史——によって、自らを教養する、そこに一切の芽の培養があります。「貴い心情」はかくして得られるのです。全的に生きる生活の力強さはそこから生まれるのです³⁸。

筒井は「教養」の語を修養から自立させて用いた最初の事例としてこの文章を位置づけている³⁹。「人間としての素質を鞏固ならしめる」ための存在として青春期の教養が言及される文脈の中で、この教養を構成するものとして数え上げられる分野が芸術・哲学・宗教・歴史である。

これらの内容には「教養」・「文化」という概念と芸術や哲学などそれらを構成する要素とが錯綜して理解しづらい部分もある。そこで改めてその関係性を整理しておこう。

先に修養から教養へという流れについて触れたが、この間にあって多大な影響を与えた人物が新渡戸

稲造とラファエル・フォン・ケーベルである⁴⁰。新渡戸は1906年（明治39）から1913年（大正2）の時期に第一高等学校の校長を務め、ケーベルは1893年（明治26）から1914（大正3）の時期に帝国大学（のち東京帝国大学）文科大学にて教鞭を振るう。新渡戸・ケーベルともに多くの学生に慕われた教師であったが、西洋の哲学や芸術に触れる必要性を説いた人物であり⁴¹、彼らの影響を受けた学生には前述の和辻の他に安倍能成や阿部次郎などがある。周知の通り、安倍や阿部はのちに大正教養主義を先導することとなる人物である。

新渡戸は学生たちに修養を勧めたが、その内容は西洋の哲学や文学を通じた人格の陶冶であることから⁴²、筒井が指摘するようにこれは「教養」と重複するところの多いものである⁴³。一高生時代に新渡戸に、東京帝国大学時代にケーベルに親しく接した和辻が後年、精神的な芽の培養のために教養として芸術や哲学・宗教を学ぶよう主張したことは、こうした経歴からしてごく自然のことであったと言えよう。

このように新渡戸・ケーベルの存在を起点として芸術や哲学などを教養の中核に据える理解が形成されていく。そして、大正時代に入って教養と文化とが密接なつながりを持つようになる。三木の文章をいまいちど振り返ってみると、明治から大正への時代の推移について、政治的傾向から反政治的・非政治的傾向への転換や啓蒙思想から教養思想への転換と関連づけた説明を行っている。政治的なものに対する反発が非政治的な分野、すなわち哲学や文学への傾斜へとつながっていったわけであり、そしてこれらの分野を教養と結びつけるだけでなく、「文化を重んじる」という文脈の中でも語っている。

以上の点から、教養と文化、そして哲学・芸術・文学等の各分野は、同心円とまではいかないものの、中心点がかかなり近い位置にある円、重なり合うところが大部分を占める円、そのようなイメージを持つものとして当時の人々に把握されつつあったと見て良い。そうした理解を踏まえつつ、井伏の文章に再度目を通してみれば「文化事業会の文化は教養または修養の意を示すカルチュアの文化であつて」、「芸術的教養の意味の文化」といった文言の示すところも障りなく解することができよう。

このように狭義の「文化」概念については、その淵源が新渡戸・ケーベルに求められ、また彼らの薫陶を受けた和辻ら大正教養主義の論者による主張に影響を受けていることは明らかであろう。また、そうした主張が広まっていく土壌として三木が述べるところの反政治的・非政治的傾向の展開があったことも見逃せない。無論、これは上述した「天下国家から個人の問題へと移行」・「国家的なものの価値の後退・相対化」と密接な関わりを持つものとして捉えるべきであろう。

狭義の「文化」理解はこうした社会的背景のもとで生まれたと考える。そして、和辻が上掲の主張を行った1917年から5年後の1922年に文化史ブームが始まっている。こうした時系列を踏まえつつ改めて文化史ブームについて眺めてみると、それが岩井の言うところの「政治や経済と区別された意味での狭義の文化現象を対象とする史的研究」であったことにも得心がいく。大正期の感覚としては、むしろ反政治的・非政治的であることに意義があり、そこに政治・経済を紐づけることは時代の空気と反りが合わなかったわけである。

前述の通り西田直二郎は質の低い（と西田の目には映る）文化史に対して強い不満を抱く。しかし、この不満は内田・原・内藤と全体的に歴史を捉える視点を持った教員の下で学べたこと、コンドルセやランプレヒトの著作を読み込む機会に恵まれたからこそ生じるものであったと言える。大正時代後半から昭和初期にあって西田のような立場の者は決して主流にあったわけではなかったが、このような立ち位置と西田の歴史理解との間にあったギャップが文化史への不満の根底にはあったと見なすこともできよう。

ともあれ、以上の整理から、【文化史①】と【文化史②】の萌芽は大正時代から昭和初期にかけての社会状況の中に存したと言いうる。

おわりに

以上、本稿では「文化史」と称する諸研究に対する分類・整理と、これらの「文化史」が生じた経緯

について確認を行った。この内容を「文化の生成・受容・変容」と関連付けるとどのようなことが分かるか、最後にこの点について述べておこう。

本稿での整理を通じて再確認できたことは「文化史」と呼ばれるものが多様な形態で存在する点である。大まかに分けて【文化史①】から【文化史③】の形で「文化史」が並存するわけであるが、これは「文化」という概念の内実が決して一様ではなかったことの反映である。そして、このように芸術や文学・思想などに特化した狭義の「文化」概念が生まれた経緯をたどっていくと、新渡戸・ケーベルを起点として西洋由来の知のスタイルが日本に受容され、和辻ら大正教養主義者によって拡散されていった歴史的展開に行き着く。狭義の「文化」概念の生成の様子をここに見て取ることができる。

【文化史①】の原点はここにあるが、それは分野を特化させた文化史の形成にもつながる。個々の分野を孤立させた歴史叙述が文化史の重種として展開されるが、これに異を唱えた者が西田である。西田は内田・原・内藤といった教員との交流やコンドルセ・ランプレヒトらの著作に刺激を受け、「文化」を政治や経済といった様々な要素と一体化した形で把握しようと試みる。ここでは「文化」概念の変容が生じており、やがてそれは石田一良らに引き継がれて文化史学の成立へと至る。

一方で、こうした一連の流れに民族学や文化人類学の流れをくむ「文化」概念が姿を現さない点に留意する必要がある。エドワード・タイラーが1871年の時点で「〈文化〉または〈文明〉とは、民族的な広い意味で捉えるならば、知識、信念、技術、道徳、法、慣習など、社会の成員としての人間が身につけるあらゆる能力と習慣からなる複合的な全体である」という定義を行っていたにもかかわらず⁴⁴、この「文化」概念が大正期の文化史に影響を与えた様子は窺えない。その理由について本稿で検討するだけの準備や余裕はないが、当然これは日本における民族学・文化人類学の受容史と関わってくる問題であろう。19世紀後半から20世紀前半にかけて【文化史③】と親和性を持つ民族学・文化人類学の「文化」概念と【文化史①】・【文化史②】が交錯しなかった歴史的経緯があり、それがまた日本の「文化」概念における独自性ある展開にもつながっていくこととなる。

文化を構成する種々の文化要素が流動的な性格を持っていることは、文化人類学を始めとした様々な分野の研究が明らかにしているところである。ただ、上に示した通り、その大本となる「文化」という概念もまた流動的な存在であることが本稿の検討から見えてきた。

この流動性は「文化」という言葉の発祥からたどっていっても理解しうる。「文化」の語は古代中国の文献に始まり、『易経』に見える「天文を觀て、以て時の変を察し、人文を觀て、以て天下を化成す」という一文を出典とする。ここでの「文」は「人倫の秩序」と解され、これを通じて民の教化、良き風俗の実現がなされるものとされる⁴⁵。そしてこの場合の「文化」は「儒教的価値観を背景とした人としての、あるいは物事のあるべき姿」が強く意識されたニュアンスを帯びる。中核にある儒教的価値観に基づいて言葉・所作の良し悪しが判断され、さらには世界観から衣食住や職業といった身近な要素まで様々な場面において「あるべき姿」は展開していく。私たちの用いる「文化」と共通する内容も含まれてはいるが、現代的な語法とは意味を大分異ならせる。

当然、儒教の伝来とともに日本でもこの「文化」の語は認識されてきた。ただ、明治・大正を通じてその内容は変遷していく。江戸から明治への移行がなされた時点で既に「文化」概念の多様化が進み、元々の「文化」概念は存在感を薄くしていったわけである⁴⁶。本稿ではこれがさらに変化を重ねていった様子について取り扱ったことになる。

いずれにせよ、様々な場面で使用される「文化」の語にはそれぞれに社会的背景があるものとして理解する必要がある。そして、それを視界に含めないまま行う理解には何らかの形でひずみが生じる危険性もあろう。

この点に関して1点だけ事例を挙げておこう。イギリスの作家ハーバード・ジョージ・ウェルズは歴史に関する著作をいくつも残しているが、日本では1921年から22年かけて『世界文化史大系』（大鑑閣）として翻訳されたものを皮切りに、『世界文化史講話』（白揚社）・『世界文化史概観』（岩波書店）など数多くの訳本が出版されている。ただ、これらの書籍は狭義の文化を主軸に据えた叙述はなされない。そして、これらの原著はいずれもタイトルに“culture”や“cultural”の単語を含めておらず、邦題との

間にギャップを感じさせる⁴⁷。

この「文化」の語が用いられた理由について本書は明示しないが、訳者が文化科学を意識して命名した可能性は高い⁴⁸。文化科学は普遍的な法則に依拠した自然科学と対になる概念で、一回性・特殊性を特徴とする事象を把握する方法論による科学を指した言葉である。この文化科学／自然科学という区分が西南学派の創立者ハインリヒ・リッケルトによるものである点を踏まえると、これらの邦題は新カント派の哲学概念を意識した上でつけられたことになる。いわばウェルズの意向とは別に訳者の解釈が反映された邦題ということになろうが、このように大正時代における新カント派哲学の流行という背景を踏まえた上で読み解かないことには本書の位置づけにもズレが生じることとなろう。

ともあれ、これらの内容から「文化」という概念にも日本の文脈に応じて生成・受容・変容というアクションが生じていることが窺われる。一方で、本稿が史学史上の展開に焦点を絞って論じたこともあり、文化人類学を始めとした歴史学以外の学問分野における「文化」概念のあり方については触れられておらず、この点には不備がある。むしろ、日本における「文化」概念の生成・受容・変容というテーマを論じるに当たって、史学史の知見だけで臨むこと自体が無理筋の話であり、様々な学問分野における学史と突き合わせつつ、より具体的なイメージを紡ぎあげていくことが今後の課題となろう。

そもそも本稿の内容自体が文化史にまつわる様々な断片を寄せ集めては縫い合わせることを繰り返しただけの代物に過ぎない。本来接合できないピースを縫い合わせることで歪な形のパッチワークになってしまっているのではないかと恐れているが、この点、今後研究が進展を見せ、あるべき形状へと復元されることを切に期待するものである。

(なかばやし ひろかず 所員 神奈川大学国際日本学部准教授)

注

- 1 拙稿「文化の捉え方・文化への接し方」(『神奈川大学アジア・レビュー』7、2020)。
- 2 間野潜龍『明代文化史研究』(同朋舎、1979)。
- 3 なお、本シリーズの目録(筆者所蔵、1997年7月発行)では「文化の基礎をなすと同時に人間のつくり上げたもっとも具体的な「かたち」である個々の「もの」について、その根源から問い直し、「もの」とのかかわりにおいて営々と築かれてきた暮らしの具体相を通じて歴史を捉え直す。」と紹介する。
- 4 笠井昌昭編『文化史学の挑戦』(思文閣出版、2005)。
- 5 小森陽一ほか編『岩波講座 近代日本の文化史』(岩波書店、2001-2003)。
- 6 同様の傾向は青木保ほか編『近代日本文化論』(岩波書店、1999-2000)にも当てはまり、多様な論点から近代日本の文化を扱いつつも、笠井編著とは関心がそこまでかぶらない。
- 7 笠井昌昭「文化史学への視点」(『日本文化史』ベリかん社、1987)、257-262ページ。なお、ページ数は新装版(1988年刊)に拠る。
- 8 「編集後記」(『文化史学』2、1951)。
- 9 『岩波講座 近代日本の文化史』パンフレット(筆者所蔵、2001年10月発行)。
- 10 小森陽一ほか編『岩波講座 近代日本の文化史』1(岩波書店、2001)、vページ。
- 11 注10前掲書、viページ。
- 12 以下、西田の略歴については柴田実「西田直二郎」(『日本民俗文化大系』10、講談社、1978)及び永原慶二『20世紀日本の歴史学』(吉川弘文館、2003)を参照した。
- 13 内田・原・内藤については岩井忠熊「日本近代史学の形成」(『岩波講座 日本歴史』別巻1、岩波書店、1963)、96-97ページや永原注12前掲書、47-51ページを参照。また、西田とこれらの教員の関係性については柴田注12前掲書、34-38ページにて触れられている。
- 14 永原注12前掲書、80-82ページ。
- 15 葭森健介「内藤湖南と京都文化史学」(内藤湖南研究会編『内藤湖南の世界』河合出版、2001)。
- 16 永原注12前掲書、82-83ページ。
- 17 西田直二郎『日本文化史序説』(改造社、1932、のち1978年に講談社から三分冊として再刊)、91ページ。なお、ここでのページ数は講談社版(一)による。

- 18 西田注 17 前掲書、7 ページ。
- 19 柴田注 12 前掲書、21-22 ページ。
- 20 本表は NDL-OPAC ならびに CiNii Books にて、1935 年までを対象として「文化史」・「文明史」の語をタイトルに含める書籍を検索し、それらを刊行年順に配列したものである。採録に当たり、再版・改訂版等はカウントの対象外とし、また資料集の類であることが確認できた書籍も掲載していない。なお、同一年における書籍の配列は著者名の五十音順で行っており、刊行月を基準としていない。
- 21 この文化史ブームについては昭和初期をピークと見なす黒田智の見解があるが、出版点数だけで判断するならば、大正末期から既に文化史への関心はかなりの高まりを見せていたとも解釈でき、この点さらなる検討が必要であろう。黒田の議論については「あたらしい文化史の登音」(『民衆史研究』80、2010)を参照。
- 22 西田注 17 前掲書、8 ページ。
- 23 柴田注 12 前掲書、35 ページ。
- 24 岩井注 13 前掲論文、97 ページ。
- 25 以下の内容については有馬学『「国際化」の中の帝国日本』(中央公論新社、1999)及び筒井清忠『日本型「教養」の運命』(岩波書店、1995、のち 2009 年に岩波現代文庫として再刊)を参照した。
- 26 筒井注 25 前掲書、97 ページ。なお、ページ数は岩波現代文庫版に依る。
- 27 有馬注 25 前掲書、272 ページ。
- 28 有馬注 25 前掲書、281-282 ページ。
- 29 筒井注 25 前掲書、97-98 ページ。
- 30 文化主義については生松敬三「「文化」の概念の哲学史」(鶴見俊輔ほか編『岩波講座 哲学』13、1968)、76-80 ページを参照。
- 31 西川長夫『国境の越え方』(筑摩書房、1992、のち増補版として 2001 年に平凡社より再刊)、柳父章『文化』(三省堂、1995)。
- 32 西川注 31 前掲書、249-263 ページ。なお、ページ数は増補版に拠る。
- 33 なお、NDL OPAC においては『十九世紀文化史の研究』(1900 年(明治 33)博文館刊行)というタイトルの書籍が見られるが、これは『太陽』の臨時増刊「十九世紀」(6 巻 8 号)及び「世界一周」(6 巻 14 号)の合本であり、本書に「文化史」の文言は見受けられないため、表 1 では採録の対象外とした。
- 34 「坪内逍遙先生」(『早稲田文学』(2-5、1935)、のち『風貌姿勢』(三島書房、1946)などに再録)。本稿での引用は『井伏鱒二全集』5 (筑摩書房、1997)、243 ページに拠る。
- 35 生松注 30 前掲論文、74-75 ページ。
- 36 「読書遍歴」(『文藝』1941 年 8 月号、のち『読書と人生』(小山書店、1942)に再録)。本稿での引用は『三木清全集』1 (岩波書店、1966)、389-390 ページに拠る。
- 37 例えば、生松注 30 前掲論文 80 ページ、柳父注 31 前掲書 41-42 ページ、筒井注 25 前掲書 106-107 ページなど。
- 38 「すべての芽を培え」(『中央公論』1917 年 4 月号、のち『偶像再興』(岩波書店、1918 年)に再録)。本稿での引用は『和辻哲郎全集』17 (岩波書店、1963)、132 ページに拠る。
- 39 筒井注 25 前掲書、101-103 ページ。
- 40 新渡戸・ケーベルについては筒井注 25 前掲書、97-101 ページ、柳父注 31 前掲書、45-48 ページを参照。
- 41 ケーベルは東京帝国大学にて西洋哲学について講じたが、その講義内容は文学やラテン語・ギリシャ語などにも及んだという。詳細は久保勉『ケーベル先生とともに』(岩波書店、1951)、32-33 ページ参照。
- 42 第一高等学校校長時代の新渡戸が行った教育については、多くの卒業生が記している。ゲーテ『ファウスト』やトーマス・カーライル『サター・リザータス (衣服哲学)』・ミルトン『失樂園』などについて講じたり、孟子や和歌の章句を引用したりと、東西を問わず広く文学や哲学に話が及んだという。差し当たり、そうした回想の一つとして森戸辰男「教育者としての新渡戸先生」(前田多門・高木八尺編『新渡戸博士追憶集』故新渡戸博士記念事業実行委員、1936)を挙げておく。
- 43 筒井注 25 前掲書、99 ページ。
- 44 エドワード B. タイラー (奥山倫明訳)『原始文化』(国書刊行会、2019)、9 ページ。なお、タイラーによる「文化」概念については、ヨハン・ゴットフリート・ヘルダーからグスタフ・クレムへ、クレムからタイラーという系譜の中に位置づけられ、またこれはアメリカの人類学者フランツ・ボアズへと受け継がれていく。こうした関係性については生松注 30 前掲論文が論じている。

- 45 『易経』 賁、彖伝。なお、訓読及び語釈については本田済『易』（朝日新聞社、1966）、175 ページに従った。
- 46 山室信一は 1931 年（昭和 6）刊行の『現代新語辞典』より「文化」と公衆道徳を結びつける用例を挙げていることから、儒教的なニュアンスを帯びた用法が完全に廃れたわけではなかったことが窺われる。詳細は鷺田清一編『大正＝歴史の踊り場とは何か』（講談社、2018）、229 ページ参照。
- 47 それぞれの原題は右の通り。『世界文化史大系』…*The outline of history: being a plain history of life and mankind*、『世界文化史講話』…*Short history of world*、『世界文化史概観』…*A short history of the world*。
- 48 『世界文化史大系』1（大鐘閣、1922）の題言に文化科学と自然科学に関する言及が見られる（3 ページ）。